

## (25) 水圧破碎による3次元岩盤応力測定法について

山口大学工学部 正会員○水田義明  
山口大学工学部 正会員 萩野正二  
山口大学工学部 佐野修

### 1. はじめに

応力測定法としての水圧破碎技術は、オーバーコアリングを必要としないので、接近点から相当深いところに適用できるという点で他の測定法に勝る長所を有するが、得られたデータの解釈がまだ確かでなく、とくに最大主応力を知ることが最も重要であるにもかかわらずこの算定に信頼性がない。また一般にボアホール軸と主応力の方向とは一致しないと考えられるが、この場合の解釈も明確にされないまま現場測定に適用されている。筆者らは室内実験を通じて得られた事実にもとづいた新しい解釈によって、水圧破碎データから3次元岩盤応力状態を算定する方法を開発し、またこの方法の実用性について検討した。この方法においては、水圧破碎によってボアホール軸を含むようなき裂が生じた場合でも、一つの主応力が必ずしもボアホール軸と平行ではないとしている。またこの場合、流体はパッカーを越えてボアホール内に流れ込むので、流量がある程度小さければ、き裂をさらに拡大することなくき裂内に定常的な流れを実現できるので、このときの流体圧からき裂面に垂直な方向に作用する直応力成分が求められるとしている。

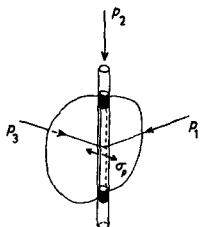


Fig.1 Conventional assumption for orientation of principal stresses with respect to the longitudinal fracture.

### 2. 従来の方法

水圧破碎を行なった岩盤中にFig.1に示すようにボアホールを含むき裂が生じたときには、一つの主応力はボアホール軸に平行であり、このときにもたらされる記録がFig.2に示されるものと考える。また流体圧が $P_b$ に達したとき、ボアホール壁面において円周方向に作用する直応力 $\sigma_p$ の最大値 $\sigma_p$ が岩盤の引張強度 $T$ と等しくなり、このときにき裂が生ずる(フラクチャリング)ものと考える。いま圧縮を正とし、 $P_1 > P_2 > P_3$ であるとすれば、 $\sigma_p = -P_1 + 3P_3 - P_b - P_0 = -T$  ただし $P_0$ はボアプレッシャーで地下水のヘッドに等しい。一方流体の圧入を止めればそのときの流体圧 $P_s$ は水平方向の最小主応力 $P_3$ とバランスする( $P_3 = P_s$ )。またいったん閉じたき裂を再び開く(リオーナング)ときの最大圧力 $P_{sb}$ を測定すれば岩盤の引張強度は、 $T = P_b - P_{sb}$ で与えられる。

すらに鉛直方向に作用する主応力 $P_2$ はかぶり圧 $\gamma h$ に等しいと考える( $P_2 = \gamma h$ )。以上のことから $P_1$ ,  $P_2$ および $P_3$ の大きさが決定される。

一般には主応力方向とボアホール軸とは一致しないが、この場合もボアホール壁面上の最大引張応力 $\sigma_p$ が $T$ に達したときに、その最大引張応力が作用する方向と直角にき裂が発生すると信じられている。すなわち $\sigma_p$ の大きさとそれが作用する方向 $\gamma_p$ に関する次式が得られる。

$$\sigma_p = \frac{1}{2} \{ \sigma_1 + \sigma_2 + \sqrt{(\sigma_1 - \sigma_2)^2 + 4\tau_{\text{eq}}^2} \} = -T \quad \dots \dots (1)$$

$$\tan \gamma_p = \tau_{\text{eq}} / (\sigma_p - \sigma_z) \quad \dots \dots (2)$$

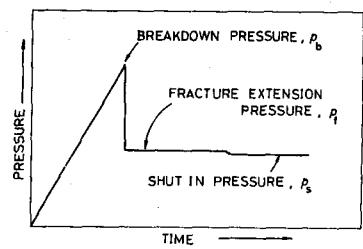


Fig.2 Idealized Pressure-time record.

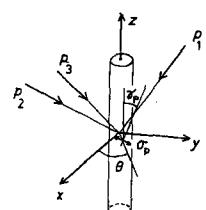


Fig.3 Traditional thinking on inclined hydraulic fracture initiation.

$$\sigma_\theta = p_x + p_y - 2(p_x - p_y) \cos 2\theta - 4p_{xy}$$

$$\sigma_z = p_z - 2p_x \{ (p_x - p_y) \cos 2\theta + 2p_{xy} \sin 2\theta \}$$

$$T_{xz} = 2(p_{yz} \cos \theta - p_{zx} \sin \theta)$$

ただしレリは岩体のボアソン比である。もしこの考えが正しいとすれば、測定された  $\sigma_p$  と  $\sigma_p$  の値から、岩盤応力状態に関する情報として、(1)と(2)の二つの方程式が与えられる。

### 3. 室内水圧破碎実験

花崗せん綠岩の岩体から採取された 400mm 立方の不透水性の供試体に、フラットジャッキを用いて 3種類の 2軸載荷を行ない、この供試体中に種々の角度でせん孔された直径 25mm のボアホール内の長さ約 100mm を、長さ 50mm (うち約 25mm が膨張) の二つのパッカでシールして、流体圧 (ハイドロクラフ油 #32) をかけて行なった水圧破碎実験のフラクチャリングにおいて発生したき裂のパターンは Fig. 4 に示すようであつた。この図において、パターン a はパッカの外側に至るまでボアホール軸を含むき裂を、パターン b は載荷されていない方向に垂直なき裂を示し、パターン a' と b' はそれぞれ a と b の不完全なものと示す。また記号 A～C は同図左欄に示された載荷の組合せを示し、記号 I はボアホール軸と  $P_2$  が傾く場合を、記号 II はボアホール軸と  $P_3$  が傾く場合を示す。なお数字は鉛直方向に対するボアホールの傾きを、破線はリオーフニング時に発生したものと示す。

フラクチャリングを行なったときの載荷を変えることなく、またサーボコントロールによつてフラクチャリング時以下の一定流量でリオーフニングを行ない、流体圧の時間変化が測定された。供試体の 27 個のうちき裂のパターン a のもの 10 個と BII-9 が定常流れを実現した。定常に達したときの圧力  $P_{st}$  とき裂に垂直な応力成分  $p_y$  との比が、リオーフニングにおける 3種類の流量に対して Fig. 5 に示されている。

### 4. 数値解析

パターン a のき裂のリオーフニングにおける定常流れを、き裂に沿つて方向に作用するせん断応力がない状態のモデルについてシミュレートするために数値解析を行なった。このき裂はボアホール軸を含むような面のうち、その面に作用する直応力が最小となる面に

MAGNITUDE OF PRESSURES APPLIED TO SIDES OF TEST CUBES (MPa) Note: $p_3 = 0$	OIL FLOW RATE (nm³/s)	FRACTURE PATTERN							
		a	a+b	a'	b	b'	c	d	e
21.0									
$p_1 = 13.78$ $p_2 = 6.89$	10.5								
	5.93	A-I							
	2.62			A-II					
					A-0				
$p_1 = 8.27$ $p_2 = 6.89$	2.62	B-I	B-II	B-0					
					B-II	B-I			
$p_1 = 6.89$ $p_2 = 3.45$	2.62	C-I	C-II	C-0					
					C-II	C-I			

Note Designation AI-9 indicates stress state AI with 9° borehole inclination

Fig. 4 Relationship between induced fracture pattern, applied stresses and fluid flow rate obtained from fracturing tests.

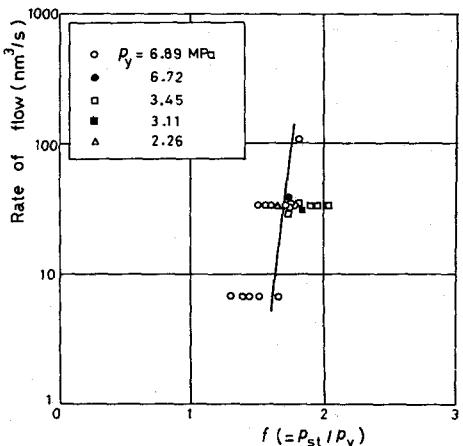
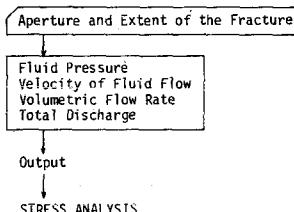


Fig. 5 Relationship between  $P_{st}/P_y$  ratio and fluid flow rate obtained from re-opening tests for the longitudinal fractures.

#### FLOW ANALYSIS by FEM



#### STRESS ANALYSIS by FEM/BEM

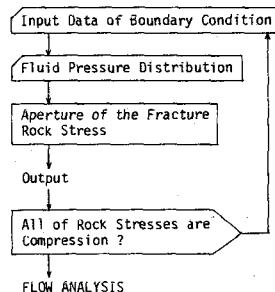


Fig. 6 Flow chart of coupled stress-flow analysis.

沿て生じたと考えられるので、この面を $y$ 面に選べば $P_{xy} = 0$ である。しかしボアホールの傾きがIの状態では $P_{zx}$ が、IIの状態では $P_{yz}$ がゼロでない。Fig.5の実線は載荷条件、ボアホールの傾き、 $P_{st}$ を種々変えたモデルに対して、 $P_{zx}$ または $P_{yz}$ を無視した解析から得られた $f (= P_{st} / P_y)$ と流量との関係である( $P_x$ と $P_z$ の影響は極めて小さい)。解析は3次元応力解析と2次元流れの解析を組み合わせて行ない、き裂内を流れ流体の透過性を表わす係数 $\alpha$ は、 $\alpha = \epsilon^3 / 12\mu$ で与えられるものとした。ここに $\epsilon$ は流体の静弾性係数、 $\mu$ はき裂の開口変位である。Fig.6にこの解析手順の概略を示す。

## 5. 新たな知見

上記の実験結果や解析結果は従来の考えが、1) Fig.1 のようなクラックに対するではFig.2に示されるような明確な $P_s$ が得られず、2)一般にはき裂はFig.3に示される $\Delta p$ の方向には生じないという点で正しくないことを示している。すなわち実際にFig.7に示すように、(a)ボアホール軸を含むき裂または(b)ボアホールと交差するき裂のいずれかが生じ、もし岩体に弱面がない、最小主応力が他の二つの主応力と比較して非常に小さければ(b)のき裂は最小主応力に垂直となる。また(a)のき裂が生じた場合には流体の大部分はパッカーを越えてボアホール内に流れ込み、流体の圧入を止めても流体は $P_3$ とバランスすることなく $P_0$ とバランスするまで徐々に下限する。なお主応力差が小さければ(a)のき裂が生じ易く、これが大きければ(b)のき裂が生じ易いが、もしどちらのき裂をも生ずる可能性がある場合には圧入する流体の流量が大きい方が(a)のき裂を生じ易い。

不透水性の堅固な岩体中に(a)のき裂ができれば流れは定常となり、このときの流体圧 $P_{st}$ はき裂面に平行なせん断応力成分には殆んど影響せず、流量の影響も非常に小さい(Fig.5)。すなわち $P_y$ だけが $P_{st}$ に大きな影響を与える、 $f = P_{st} / P_y$ は室内実験または解析から求めることができる。またき裂を発生させたボアホール壁面上の引張応力( $T$ )は、き裂面に垂直な接線応力 $\sigma_p$ に等しい。

## 6. 応力算定の手順とその精度

いまm本のボアホールにおいてボアホール軸を含むき裂(Fig.8)ができる、n本のボアホールにおいてボアホールと交差するき裂(Fig.9)ができるものとする。両図の座標に対して各応力成分は、

$$P_{x0} = P_1 \cos^2 \alpha_0 \cos^2 \beta + P_2 \cos^2 \alpha_0 \sin^2 \beta + P_3 \sin^2 \alpha_0, \quad P_{y0} = P_1 \sin^2 \beta + P_2 \cos^2 \beta,$$

$$P_{z0} = P_1 \sin^2 \alpha_0 \cos^2 \beta + P_2 \sin^2 \alpha_0 \sin^2 \beta + P_3 \cos^2 \alpha_0, \quad P_{xy0} = 0.5(P_1 - P_2) \cos \alpha_0 \sin 2\beta, \quad P_{xz0} = -0.5(P_1 - P_2) \sin \alpha_0 \sin 2\beta,$$

$$P_{zy0} = P_1 \sin^2 \alpha_0 \cos^2 \beta + P_2 \sin^2 \alpha_0 \sin^2 \beta + P_3 \cos^2 \alpha_0, \quad P_E = P_{x0} \cos^2 \phi_0 + P_{y0} \sin^2 \phi_0 - P_{xy0} \sin 2\phi_0.$$

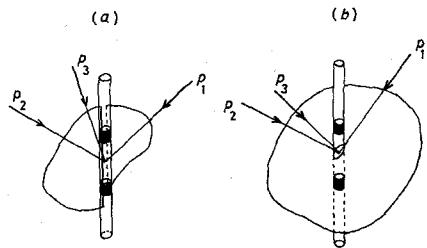


Fig.7 Two kinds of typical fracture patterns, longitudinal (a) and transverse (b).

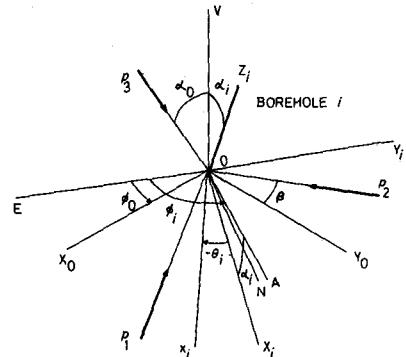


Fig.8 Orientation of the longitudinal fracture (lies in the  $x_i$ - $Z_i$  plane) induced in the borehole  $i$  with respect to OENV and the principal stresses.

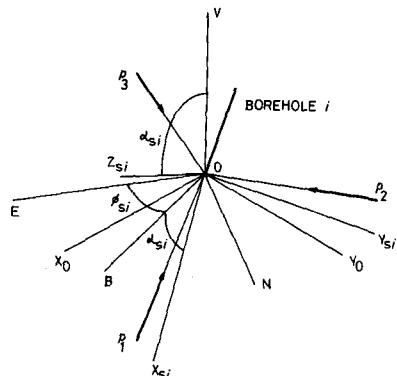


Fig.9 Orientation of the transverse fracture (normal to the direction of  $Z_{si}$ ) induced in the borehole  $i$  with respect to OENV and the principal stresses.

$$P_N = P_{x0} \sin^2 \phi_0 + P_{y0} \cos^2 \phi_0 + P_{xy0} \sin 2\phi_0, \quad P_V = P_{z0}$$

$$P_{EN} = 0.5 (P_{x0} - P_{y0}) \sin 2\phi_0 + P_{xy0} \cos 2\phi_0, \quad P_{NV} = P_{y0} \cos \phi_0 - P_{x0} \sin \phi_0$$

$$P_{VE} = P_{y0} \sin \phi_0 + P_{x0} \cos \phi_0$$

$$P_{xi} = P_{x0} \cos^2 \alpha_i \cos^2 (\phi_i - \phi_0) + P_{y0} \cos^2 \alpha_i \sin^2 (\phi_i - \phi_0)$$

$$+ P_{xy0} \cos^2 \alpha_i \sin^2 (\phi_i - \phi_0) - P_{x0} \sin 2\alpha_i \sin (\phi_i - \phi_0) - P_{xy0} \sin 2\alpha_i \cos (\phi_i - \phi_0)$$

$$P_{yi} = P_{x0} \sin^2 (\phi_i - \phi_0) + P_{y0} \cos^2 (\phi_i - \phi_0) - P_{xy0} \sin 2(\phi_i - \phi_0)$$

$$P_{2si} = P_{x0} \sin^2 \alpha_i \cos^2 (\phi_{si} - \phi_0) + P_{y0} \sin^2 \alpha_i \sin^2 (\phi_{si} - \phi_0)$$

$$+ P_{xy0} \cos^2 \alpha_i + P_{xy0} \sin^2 \alpha_i \sin 2(\phi_{si} - \phi_0) + P_{y0} \sin 2\alpha_i \sin (\phi_{si} - \phi_0)$$

$$+ P_{x0} \sin 2\alpha_i \cos (\phi_{si} - \phi_0) = P_{si} \quad \dots \dots (3)$$

$$P_{xi} = P_{xi} \cos^2 \theta_i + P_{yi} \sin^2 \theta_i - P_{xyi} \sin 2\theta_i$$

$$P_{yi} = P_{xi} \sin^2 \theta_i + P_{yi} \cos^2 \theta_i - P_{xyi} \sin 2\theta_i = P_{st}/f \quad \dots \dots (4)$$

$$P_{zi} = 0.5 (P_{xi} - P_{yi}) \sin 2\theta_i - P_{xyi} \cos 2\theta_i = 0 \quad \dots \dots (5)$$

$$\sigma_{pi} = -P_{xi} + 3P_{yi} - P_{bi} = -T \quad \dots \dots (6)$$

測定データ ( $f, T, \alpha_i, \alpha_s, \phi_i, P_{bi}, P_{st}, \theta_i, \alpha_s, \phi_s, P_{si}$ ) から

(3)~(6)式および  $P_V = \sigma h$  を満足する解を求めればよいのであるが代数的には解けないので、制約条件のない最適化の手法を用いる。すなはち、目的関数

$$W = \sum_{i=1}^m \{ (P_{yi} - P_{sti}/f)^2 + P_{xyi}^2 + (\sigma_{pi} + T)^2 \} + \sum_{i=1}^n (P_{si} - P_{sl})^2 + (P_V - \sigma h)^2 \quad \dots \dots (7)$$

を最小にするベクトル ( $P_1, P_2, P_3, \alpha_0, \phi_0, \beta$ ) を求める。しかし、もし、岩体に弱面が見られないのにボアホールと交差するき裂ができた場合、主応力差がかなり大きいと考えられる。したがってこのき裂が最小主応力  $P_3$  に垂直であると信じれば、 $\alpha_{se} = \alpha_0, \phi_{se} = \phi_0, P_{sl} = P_3$  となるので、(7)式を最小にするベクトル ( $P_1, P_2, \beta$ ) を求めればよい。一例として、不連続面のない堅固な岩体中の傾きの異なる 32 本のボアホール  $\alpha_1 = 30^\circ, \phi_1 = 92.35^\circ, \alpha_2 = 90^\circ, \phi_2 = -2.3^\circ$  においてボアホールと交差するき裂が得られ、これらのき裂がほぼ同じ向きを示しており、同じ 2 本のボアホールの別のセクションを大きい流量で水圧破碎したらそれがボアホール軸を含むき裂ができた場合を考えよう。この場合ボアホールと交差するき裂は最小主応力に垂直であるとして  $P_3 = 5 \text{ MPa}, \alpha_0 = 30^\circ, \phi_0 = 30^\circ$  が得られたものとする。いま正確な水圧破碎データ ( $P_{bi} = 21.33 \text{ MPa}, P_{st} = 8.61 \text{ MPa}, \theta_1 = -18.66^\circ, P_{b2} = 14.55 \text{ MPa}, P_{st2} = 9.06 \text{ MPa}, \theta_2 = 114.66^\circ, T = 5.0 \text{ MPa}$ ) が得られたとして、上記の方法で岩盤応力を算定すれば、Table 1. に示す値が得られた。ただし  $\sigma h = 7.35 \text{ MPa}, f = 1.5$  とした。また水圧破碎データ、および  $f$  の値すべてについて 10%、角度については 5° の誤差があった場合に、

これらのデータから岩盤応力を算定すれば同表の右欄に示すような誤差が表わされた。これらの値は測定値の誤差と算定値の誤差が同程度であることを示しており、この算定法は実際に適用できると考えられる。最後に、地下空洞の設計のための応力測定において、筆者らが現在用いている水圧破碎による応力測定システムを Fig. 10 に示しておく。

Table 1. Calculated stresses in the rock and their errors

Six stress components	Calculated stresses (MPa)	Errors due to $\pm 10\%$ or $\pm 5^\circ$ errors in every measured values (MPa)
$P_E$	10.49	-0.68 0.22
$P_N$	12.16	0.42 -0.03
$P_V$	7.35	0.99 -0.76
$P_{EN}$	1.33	-0.73 0.67
$P_{NV}$	1.34	0.37 -0.19
$P_{VE}$	-3.93	0.07 -0.35

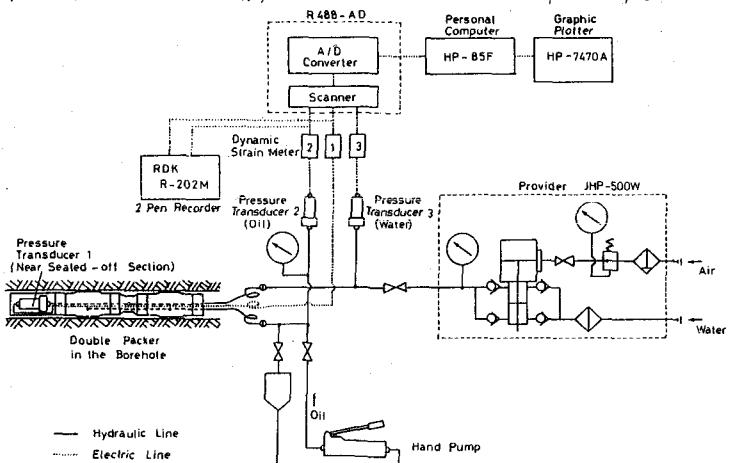


Fig. 10 Outline of the hydraulic fracturing apparatus for rock stress determination with the purpose of design of underground space.

(25) A Procedure for Three Dimensional Stress Determination  
by Hydraulic Fracturing

Yoshiaki Mizuta, Shoji Ogino and Osamu Sano

Faculty of Engineering, Yamaguchi University

For the determination of in-situ stresses, hydraulic fracturing has an advantage over other stress measuring methods, in that it can be used at considerably greater depths from a point of access.

Despite the increasing use of hydraulic fracturing, however, there are uncertainties associated with the interpretation of the resulting data. In particular, confidence in the calculated maximum principal stress is less than in the minimum principal stress, although the former is often of great moment. Furthermore, where the borehole axis is not parallel to principal stress direction, the interpretation of hydraulic fracturing data with respect to stress magnitudes and directions is unclear.

Laboratory hydraulic fracturing of intact rock in biaxial compression was effected in order to investigate fracture extention under conditions in which the principal stresses were inclined to the axis of the pressurized borehole.

In-situ hydraulic fracturing of jointed rock was also carried out in order to investigate joint effect on fracture initiation direction and pressure-time relation.

Two typical fracture patterns were produced, which were able to occur at any borehole onclination.

One type of fracture, called here a "longitudinal" fracture initiated along the borehole axis bypassing the sealing elements, the fracture changing direction to become perpendicular to the minimum principal stress after bypassing the sealing elements. Re-opening such a fracture using low fluid injection rates leads to a stable flow established whereby fluid flows into the borehole beyond the sealing elements. For a given flow rate, the fluid pressure is proportional to the normal stress component perpendicular to the fracture, the pressure being scarcely affected by the remaining stress components. Numerical analysis, applying the concept of an hydraulic aperture, was employed to explain these facts.

The other type of fracture, called here a "transverse" fracture initiated across the sealed-off section. This fracture is perpendicular to the minimum principal stress and continued to extend in this plane, if it is produced in intact rock, suggesting that difference among principal stresses are relatively large.

Short sealed-off section, short sealing elements and rapid fluid injection may assist in producing a fracture of the first type.

The study suggests that the complete stress state in intact rock can be evaluated from tests on two fractures (longitudinal and transverse fractures) in a single borehole and the authors proposed a overall procedure for three dimensional stress determination, interpreting hydraulic fracturing data from the boreholes with different inclination. Hydraulic fracturing data from "transverse" fracture produced in jointed rock can be also utilized in the procedure.

In order to examine the accuracy of the method, example hydraulic fracturing data were considered and it is found that three dimensional stress state can be given with some accuracy.

Finally, outline of the hydraulic fracturing apparatus for the rock stress determination for the purpose of design of underground space, which the authors are now using, was shown.